
追鬼響

蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追鬼響

【Nコード】

N 8 6 2 1 M

【作者名】

蒼空

【あらすじ】

どぐりと私の中で、「核」が脈を打った。そして、体中の隅々にまで滾る^{たぎ}血が巡り渡るのを感じた。

——来る、鬼が。

ある日私は鬼を見た。以来、体の中に巣食ったものが私を黒い衝動へと駆り立てる。

鬼は私の中に化身を残した。化身は核となり、私の中でうねり狂う。私は望まない永久の命と治まらない渇きに喘ぎ、追いかけてくる蟬の声と終わりのない苦しみに悶え、繰り返すしかない惨事と哀れな

己に絶望した。

その時間こえてきたのは、自らの手で殺めた妻の声だった。

私に、この暗闇の輪廻に、「終わり」という安らぎは訪れるのだからか――

蟬の声が鳴っている。幾重にも重なり合い、他の音をすべてのみ込んでいる。

頭が割れそうだ。

永久の命に憧れる者はいるだろうか。いるとするならば教えてやりたい。長く生きるということは、決してよいものではない。

私の齡は、おおよそ三百を越えたあたりだった。勿論、「普通の人間」だ。いや、こうなってしまったからには「だった」と言ったほうがいいかもしれない。しかし、傍目からは例外なく、どこから見てもただの人間なのだ。

「こんにちは」

老婦人が話しかけてきた。

「こんにちは」

腰を折って挨拶を返す。

老婦人は、重力で溶け落ちそうな皮膚を押し上げながら私に笑いかけた。そして私の腰掛ける道端のベンチの前で立ち止まり、社交辞令じみた世間話を始めた。

「今日もまあ、暑いですねえ」

「そうですね」

退屈に思ったが仕方がない。婦人の目からしてみれば、私も日常の時間を持て余す老人仲間映るのだ。

通常とは異なった時間が流れているらしい体で三百年あまりを生きてきたが、私もようやく晩年に近づいたのか身体は老年期に入っていて、顔面には大小無数の皺が刻まれ、頭髮の殆どは白髪、声もしわがれていた。

しかし、まだ死ぬことは許されていないらしい――。

「今日はですねえ、夏休みに入った孫がうちに遊びに来るんですよ」
「そうですか」

「あなたお孫さんは？」

「いえ……」

あらそう、と言うと老婦人は再び微笑んだ。

どくりと私の中で、「核」が脈を打った。そして、体中の隅々にまで滾る血が巡り渡るのを感じた。

——来る、鬼が。

幾度も経験していることだが、これを衝動と呼ぶのかは分からない。しかし、次の瞬間には、必ず血の海が目の前に広がる。私の中の核がそれを求めるのだ。

今日懷に隠していたのは小型のハンマーだった。人を殺めるには充分な威力を発揮する。気付いた時にはもう老婦人の頭めがけ、私は何度もそれを振りおろしていた。

相変わらず背後では、蟬の声がうるさく鳴っていた。

時を遡り、私の体が真実の青年期にあった頃。私にも家族があった。父母がいて、祖母がいて、妻がいて、子があった。

私たちは下町の隅で小さな傘屋を営んでおり、傘の修繕や張替を生業にしてひっそりと暮らしていた。裕福とは言えなかったが、心優しい妻と温かい家族に囲まれ、人並みに幸せに暮らしていた。

しかし、ある日を境にそれは変わってしまった。

私の体は夜毎に震えた。突き上げる衝動に怯え、煩悶した。

どす黒く、煮えたぎった何かが全身を駆け巡り、その熱さと皮膚を突き破りそうな痛みに耐えた。痙攣に近い震えが起こり、手足が強張り、床を掻きむしっていなければ気が狂いそうだった。最初、妻は酷く狼狽し、悪い病だと勘違いしたようだったが、私がそうで

ないことを説明をすると、誰もが信じなかったあの話を涙ながらに受け止めた。

あの話……

そう。私は鬼を見たのだ。

私は山の中で、光る目の鬼を見た。

その日。私は三里ほど離れた隣町に納めの傘を届けるため山越えをしていた。暑さを凌ぐため、折り返しの道には竹藪を抜けることを選択した。

通常の道筋から外れ、脇道に入った。傾斜を下り、踏みならされた土壌を辿るようにして進む。

竹藪に踏み込むと、空気は冷やりとしていた。薄暗く湿っぽい為、気味の悪さを感じたが、気温と日射を遠ざけるためにこそ選んだ環境だった。

私は、夕げにまでは帰りつきたいと家路を急いだ。

しばらく進んでいると、遠耳に聞こえる蝉の声と葉の摺り合うざわめきの間から、「ぎゃ」とも「ぐえ」ともつかない、獣の声の様なものがした。

この辺は狐や猪が出ることもしばしばで、おおかたその類が縄張り争いでもしているのだらうと思い、私は巻き添えを食らわないようにと足を速めた。

すると、

「助……け、て……」

消え入りそうだが、苦しみに濁った人間の声が聞こえた。

空耳ではなさそうだ。そして常軌を逸したその声色に、私の全身は粟立った。

「そ、そこに誰かいるのか……!」

私の問いに答える声はなく、今度はガサゴソと言う、物を引きず

るような音だけが聞こえてきた。重さのある物を引きずっているようだったが、素早い動きであることがわかる。

その時、黒い影が竹の間を移動して行った。私は瞬きも忘れてその影を目で追った。黄色い光が二つ、ギリリと光った。人間ではない者の目だ。血の気が引くのと同時に、私はそれを鬼だと思った。

鬼の目はじっとこちらを見てきた。

陽の落ちかけた竹藪は薄暗さを増し、それを背景に目の光だけが浮かび上がっている。ますます眼力を強め私を刺してくる。

遠くに聞こえていたはずの蝉の声が物凄い爆音となって迫ってきた。私は激しい頭痛を覚え、その場にうずくまった。

すると次の瞬間、腹の奥でどくりと何かがうごめいた。

こぶし大の、塊のような何かが、私の中心でのたうつのを感じた。

(な……なんなんだ、これは………)

その異物感に操られるようにして、一步、一步と、私は鬼の方へと歩み出ていた。

鬼に近づくと、今度は急に解き放たれたようになった。ふわふわとした心もちで私は半ば恍惚とし、空っぽになった頭で鬼の所業の一部始終を眺めていた。

鬼は仕留めた獲物の四肢を引き千切り、むしやりむしやりと肉に喰らいついていた。

手入れのされていない鬱蒼とした竹藪の中。滴る鮮血が辺りを染める。生臭い匂いが立ち込めている。

次に鬼は、獲物の衣をバリバリ剥ぎ取った。そして鋭い爪で腹を裂くと、臓物を引きずり出してそれを啜った。

この光景……それはこの世のものではない。この世のものとは思えない。私の正常な部分が否定する。しかしその場から一步も動くことができず、惨状から目を離すことができなかった。

離すことができなかった？動けなかった？——いや、私自身がそうしなかったのかもしれない。妙な心地よさに取り憑かれたようになり、その心地よさを貪っていたのかかもしれない。

眼前を染めゆく血の赤は、ひたすら私を轟々と揺さぶった。そのうちに体内の全てが煮えたぎったような感覚に陥った。

間もなくしてそれは精神にも浸食してゆき、味わったことのない苦しみに変わった後は、私は喉をむしってその場でのたうった。

その後の記憶はない。

気付いた時には藪の奥深くで倒れており、村の衆に発見され、後に町まで送り届けられた。

多くの人に竹藪で見た光景を説明したが、狐につままれて悪い夢でも見たのだろうと、取り合ってくれるものはいなかった。

確かに、説明のつくものや痕跡、証拠になる残骸など、一切残っていないかったのだ。初めから何もなかったように、草木の一本も折れてはいなかった。獣の縄張り争いどころか、動物の通った跡すら見当たらなかったのだ。

しかし、私にははっきりとわかる。鬼は私の中に化身を残した。化身は核となり、私の中でうねり狂う。私の中に誕生したそれは今も血を求め、腹の底で舌なめずりをしている。

「きゃー」という甲高い悲鳴が聞こえた。

どうやら老婦人を滅多打ちにしているところを誰かに見られたようだ。私はだらりと腕を下ろし、声の方に顔を向けた。

「ひ、人殺し！」

人殺し。聞き飽きた代名詞だ。

私は路上に崩れ落ちた赤い塊に視線を戻した。そして、

「私に孫はないんですよ……」

そう言い残すと彼女に背中を向け、ゆるりとその場から立ち去った。背後では騒然とした女の声が、誰かしらに助けを求めている。

無駄だ。私は捕まらない。そして死なない。

私が自分の家族を殺した日。後ろ手にされ、お縄に付いたのは夕方。方に差し掛かる頃だった。惨事は起こるべくして真夜中に起きた。しかし、役人に連れ出される時には、うだるような午後の陽射しが、開け放たれた板戸から射し込めていた。

西日に照らされた座敷は、そこいら中が血だらけだった。私が初めて築いた血の海だ。そこに一つ、二つと、息をしなくなった家族が転がっている。同じ長屋に住まう者に発見された時、私は声高に悲鳴に近い笑い声を上げ、それらを見ながら土間に座り込んでいたという。

衣は血に染まり、狂ったように笑う様は、誰から見ても正気の沙汰ではなかったことだろう。

しょっ引かれて行く道中、神社の境内で競うようにして鳴き合う蝉の声が頭をつんざいた。頭が割れそうだった。蝉は七日間の命だと聞く。その短い生命の全てを引き出し声を上げているのだとすれば納得できた。

私は思う。蝉の鳴き声は、死へと向かいゆく者の声だ。

私が鎌を振り下ろした時、家族も同じような声をあげて絶命した。蝉よりも数百倍、数千倍も長い生涯だったせいか、命の終わりに氣付いた時、蝉よりも激しく家族は叫喚した。

私は虚ろに境内の大樹を見上げた。これだけの大きな響音を放つてい
るにもかかわらず、一匹もその姿を見付けることはできなかった。

取り調べを終え、裁きが下って数日後。打ち首を言い渡された私は、
薄っぺらい莫座の上にひざまずかされていた。

「辞世の言葉はあるか」

酷い罪人相手にも、介錯人は丁寧に應對してくれた。私は「ござ
いやせん」と答え、地面に首を垂れて目を閉じた。背後に太刀が下
ろされたのを感じたが、不思議と寸分の恐怖も感じなかった。

その後、意識が戻ったのは深夜だった。驚くことに私は、晒し首
の台座の上で目を覚ましたのだ。そしてさらに驚くことに、這いず
ってこちらに近づいてくる自分の胴体を見た。

当然首はない。首はここにある。今の私自身だ。胴体は手探りを
しながらも、真っ直ぐ私に向かって這ってきている。私は小さく悲
鳴を上げた。自分の身に起きていることとはいえ、それは怖気の震
う光景だった。

一体何が起きているのか。目の前で見ているものは幻なのか。切
り離された首であるはずの私が、何故覚醒しているのか。

台の前まで来ると胴体は立ち上がり、首を持ち上げた。その瞬間
私は、「核」のせいだと悟った。

それから長い間を私は生きた。何度死んでも息絶えることはなか
った。命にかかわるような傷を負っても、数時間後にはきれいさっ
ぱりに消えていた。多少の無駄が効く体になり、それを駆使して私
は逃げ延びた。

近年、捕まったことも何度かあった。だが不思議なもので、私の
体は事を起こす度に変化をし、見目形だけでなく、細胞やDNAに
おいても、殺人現場に残ったものとはまったく別の物に形を変える
のだった。

ほどなくして私は、毎度のごとく釈放される。殺人鬼のものは異なる体を裁くことはできないらしく、身元もなく国籍すらない私は、犯人と勘違いされた浮浪者として再び世に放たれるのだ。

殺しては逃げ、捕まっては逃れ、湧き上がる衝動のままに、私は幾度も人を殺めてきた。

しかし、渇きが治まることはない。

鬼にもなれず、人にも戻れず、ただ彷徨い続けている。

だたひたすらに破壊のみを繰り返し、気が遠くなりそうなほど何度も夏を迎え、そして今年も蝉の声を聞いた。

今日も割れるように、頭が痛い。

蝉の声が追いかけてくる。死へと向かう者の、最後の声が――

「鈴……」

森に身を潜め、小川で血を洗い流し、藪に築いた一夜の床から月を見上げ、知らずと妻の名を呟いた。

鈴。私は一体、何者なんだろうか。この先、何処に向かってゆくのだろうか――

今年の夏はいやに暑い。死なないとはいえ、老いた体に負荷を感じる。

数年前から私は急に老い始めた。よくは分からない、理由は分からないが、今や私自身ともいえるこの「核」が、衰えているに違いなかった。

だとしたら願ったりだ。言うまでもないが、私はとくに生きていたくなどないのだ。

血を見たいと思う衝動にも辟易する。身体を襲う気の狂いそうな黒い迸りにも憔悴する。そしてこの茫漠とした悲しみにも……

死なないのではなく、死ねない体。

地獄にも思える永久の命。

もう沢山だ。この呪縛から、どうか私を解放してくれ――

私は死にたい。

私は、鈴のところに行きたい――

妻の笑顔が眼裏に浮かんだ。それと同時に、手にかけた時の妻の顔が脳裏をかすめた。

そう言えばあの時も、妻は微笑んでいた。

そうだ。

「絶叫や断末魔を上げることもなく、最後の瞬間も妻は、私に優しく笑いかけた。」

そして言った。

（あんた……気の毒な人）

あの時の妻の言葉を思い出した途端、止め処もなく涙が溢れ出た。今でしか知り得なかったはずのこの苦しみを、妻はあの時理解し、嘆いてくれたというのか。

空に浮かぶ月が滲む。その光が、体の奥深くまで沁み入ってくるようだった。

夜のはずなのに、どこからともなく蟬の声音が聞こえてきた。

しかし割れるような頭の痛みはなかった。苦痛に襲われることはなく、そのかわりに不思議な感触が身を包んだ。

そしてその中に鈴の声を聞いた。

（随分と生き地獄を、味わいましたねえ――）

「来てくれたのか……」

私はそのまま目を閉じた。安らかな気分だった。蝉の声は消え、白い光に包まれた。

その晩私は、産まれて初めての静寂を手に入れた。

(後書き)

‘夏のホラー2010’へ参加するために書き下ろしました。
どうぞよろしくお願いします♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8621m/>

追鬼響

2010年10月10日03時09分発行